

雷になった大介さま

前説

以前に『狐のいない海』という小説を書きました。わたしの地元につたわる伝承いくつかに端を発している、現代のお話です。その中に出てくる、かつ幼いころからなじみのあった武将三浦大介義明という人物を追いかけた人たちを追いかけています。最近わかってきたことがいくつかあって、そのうちのひとつを簡単にまとめました。

『狐のいない海』はウェブでも読めます。よろしければこちらもぜひどうぞ。

<https://ncode.syosetu.com/n3195gc/>

大介って誰？

そもそも大介ってだあれ？ というのがお読みのみなさまのご感想ではないかと思います。大介というのは役職からきた一種の愛称のようなもので（学校の先生で「大先生」とあだ名されているイメージです）、本名は三浦義明（みうらよしあき）といいます。平安時代末期の武将で、鎌倉時代に幕府の重鎮となる三浦義澄（みうらよしずみ）の父、三浦義村（みうらよしむら）の祖父に当たります。2022年の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」では、序盤でその戦死が言及されました。源頼朝のために戦って死んだ人なんです。

1180（治承4）年に頼朝は挙兵しますが、8月末の富士川の戦いで大敗してしまいます。大介はそのとぼっちりを食ったようなかたちで自らの拠点、衣笠城に籠城して戦うことに。しかし戦果はかんばしくなく、大介は息子以下一族郎党をすべて逃がし、自分と城が犠牲となることを選びました。

「鎌倉殿の13人」ではやや人でなし風味に描かれている頼朝ですが、自分のために粉骨碎身してくれた人のことは特別大事にしていたようです。1194（建久5）年、頼朝は大介の菩提を弔うため、現在の横須賀市大矢部にお寺を建てる準備を始めます。この寺は現在の満昌寺だと考えられています。鎌倉幕府が滅亡した翌年に当たる1334年、満昌寺は天岸恵広（仏乗禅師）によって臨済宗の寺となり、現在に至っています。満昌寺はのちほど出てきます！

1212（建暦2）年、大介から見ると孫にあたる和田義盛が、寺をひとつと神社をひとつ創建します。寺は義盛の父杉本義宗と、叔父の三浦義澄の菩提を弔うため。そして神社とはいえば、満昌寺の鎮守とするために大介その人を御霊明神として勧請します。これより先、現代に至るまで、大介は満昌寺で菩提を弔われつつ、寺の境内社にあたる御霊神社で御霊とされるという二重祀られ状態になります。

御霊=天神=雷

さて、御霊信仰というのは、なんらかの恨みを抱いて死んでいった人物が祟るので神格化して祀るものです。政争の果てに左遷されて太宰府で没した菅原道真がなぜ現在天神になっているのかというと、道真が御霊だと見なされたからなわけです。

道真の死の少しあと、「清涼殿落雷事件」というものが起こります。これは読んで字のごとく、宮中の清涼殿という建物に大きな雷が落ちた事件。数名が亡くなり、もともと体調のかんばしくなかった宇多天皇はこれを期にみるみる体を壊し崩御したと言われています。これは道真の怨霊が怒ったために違いないとされ、道真が当時御霊として祀られる契機になったと考えられています。そんなわけで、現代では雷神というと天神（＝菅原道真）と捉えられがちです。また、道真以外の御霊全般にも雷のイメージがつきまとうようになりました。

じゃあ、大介が雷になったというのはそういう意味……？ そうなんです、と言いたいところなんです、そうシンプルな話でもないんです。大介の場合、御霊=雷神としてのイメージはあとからどんどんどんどんふくれあがっていきます。近代に至ると、地元の人たちが中心となって、みんなが寄ってたかってさらに義明を雷神のような存在に仕立て上げていきます。でも明治以降の当事者たちにはその自覚がまったくなかったんじゃないか。そのつもりはなかったのに、語りなおされるたびに大介はどんどん雷神になってしまったのではないか。そのことをおもしろがるのがこのブックレットの目的です。

三浦大介の神話

さて、大介が雷になったことはどこで確認できるのでしょうか。この新しく作られた神話は、近代に完成し、そのままなんとなく放っておかれて現代に至っている、というのがわたしの考えです。大介神話を完成に導いたお話を、少し長いですがお読みください。

三浦大介は、軽く武装して、雨中を愛馬「黒雲」に悠然と打ち跨り、鞍頭裕かに紫の手綱を操つて、弓箭と太刀とを佩びた盛久・盛賢二法師を前後に従へて清雲寺の裏阪を下った。

不思議や「黒雲」は、老松の根元に並び立つた黒・白兩石の前に停つて、鞭てども、煽れども、更に動かぬ。此の老松は、翠蓋を擴げたやうで「傘松」と呼ばれ、道祖神の祠が祀られ、黒白兩石と共に、神木・神石として、崇敬された。大介は「乗馬の止って動かぬも神意にや。」と思ひ、馬を下り、深谷廟所の森を遙拜して、一箭を放ち、盛久・盛賢をして鞍を卸し轡を外づさしめ、「黒雲」の鬣を撫でて多年の勤労を慰め、「武勇勝れた善き主を取り、天晴れ功名して、流石は大介が馬なり。」と、世に謡はれよ。」と言ひ聞けて、放たしめた。

「黒雲」は、頭を垂れて凝立した。大介は、鎧を釋き、老松の邊の芝生に、坐を占め、襟を正し、襖を結び、盛久・盛賢か謡經裏に、銘刀國光もて割腹した。

「黒雲」は、一聲高く斬き、真一文字に田間を馳せて、東北の邱陵に登り、或る松樹の下に到り、舌を嚙んで斃れた。一條の電光は、老松の根元、大介の遺骸の邊から立ち昇り、一天俄かに曇り、雷鳴轟いて強雨篠を束ねて降った。

盛久・盛賢は、安房に潜行して、大介が最後の模様を三浦別當義澄等に報告し、三浦國光の短刀を渡して後、踪跡を韜まし、数年にして長狭の草庵に歸住し、折折は、衣笠の里へも、其の老姿を現はすこともあった。

『三浦大介及三浦黨』第六編 三浦大介及其一門の逸事 第二十四章 孤児 第六齣 老松 [\(注1\)](#)

北村包直と著作について

大介神話の雷神性について解説する前に、著者をご紹介します。北村包直（きたむら かねなお、1866～1935）という人物です。三浦半島郷土史研究家で、小学校・師範学校の教員を経て横須賀高等女学校（現神奈川県立大津高校）校長を務めました。横須賀市史調査委員などの役職も歴任し、左で引用した『三浦大介及三浦黨』（1925）などの著作を手がけています。とくに三浦一族の研究に関しては近代に入ってから第一人者と目されています（[注2](#)）。

ただし業績には功罪があり、とくに歴史資料から読みとれることがらと、地元の伝承として残っていることがらをごたまぜにして本に書いてしまったことは包直を読む上で知っておかなければならないことです。また、自身が集めた資料を後世に残すことがなかったため、現在では包直がどのような伝承を蒐集したのかを分析・検討することができなくなっていました。後年、郷土史家の赤星直忠がこのように苦言を呈しています。

この本があまりに現実の場所について明瞭にかかる事があった、かかる名があつた。こんな話があると如何にもまことの如く書かれたため、当時三浦大介並びに其一党の研究者として第一人者と考えられた人の著作だけに之が全部信実のものとして其の土地に語られる様になり、



現実、現実に其の土地に伝わっていたものと、新たに北村氏の創作によつたものが一緒くたになつて改めて土地の人に記憶されるに至つたことは、今日三浦氏一族のことを実地に調査するに当つて昔からの伝えをそのままの形で求め出すのに極めて不便なものとなっていることを知つた。北村氏がこの著をされるに際し実地について長年月調査した資料や文献資料は相当あつたらしいのに之を整理して「三浦氏に関する資料」として残されることがなかつたらしい。「三浦大介及び三浦黨」が出版されると其の原稿を大介の墓に埋めてしまったのであるがこの時其の根本資料も一緒に埋められたのではないかと思う。根本資料の残されなかつたことをまことに惜しく思う。（[注3](#)）

見開き中の画像はそれぞれ横須賀市大矢部にある「腹切松公園」。

雷が昇ることと雷の子であること

包直による義明の神話の中で、注目したいのは雷がどう扱われているか、ということです。もう一度該当箇所を抜き出してみましょう。

「一條の電光は、老松の根元、大介の遺骸の邊から立ち昇り、一丈俄かに曇り、雷鳴轟いて強雨篠を束ねて降った」

電光が松の木の根元から天に昇ったこと。するとにわかに空が曇り、雷鳴がとどろいて大雨が降り出したこと。これらに雷神性を見いだしたいのです。どういふことなのか。

雷神性について考えるために、ざっくりとふたつのルートを用意したいと思います。ひとつは冒頭で解説した御霊=雷神ルート。もうひとつは、御霊とは直接関係のない文脈で、雷について語ってきた国内の神話や伝説です。前者をいったん置いておいて、後者について日本民俗学の創始者である柳田國男に聞いてみたいと思います。

雷が昇るというのは重要なモチーフです。柳田は「雷神信仰の変遷」(注4)の中でふたつの伝説を上げています。ひとつが子どもの雷が落ちてきて農民に命を救われ、水と子どもを授けることと引き換えに天に帰っていく「道場法師」譚。もうひとつが大山咋(おおやまくい)神と玉依(たまより)姫の間に生まれ、雷となって昇天したという別雷神(わけいかづちのかみ)です。

柳田は「雷神が地に落ちて童子となり、農夫に養はれた結果、其田ばかりには思ひのまゝに雨が降つたとある。是は夕立の神ならば必ずさう無くてはならぬ」と言います。農業にとって雨はなくてはならないもので、雨を呼ぶことができるのが雷だと考えられていたというわけです。

雷のあとに雨が降る、というのは、夕立のある地域であれば珍しくなく経験することです。雨をつかさどる存在としての雷という信仰は東アジアに広く見られるもので、ついうっかり人間界に落っこちてしまって人に助けられる雷という伝承も日本特有のものではないそうです。雷に雨を降らせる「雷法」という術は宋代の中国で広く流行したといいます(注5)。同じように(包直が意識していたかどうかは別として)、大介は雨の中で死ぬのではなく死んで雷を出し、雨を降らせる男になったのです。

ただし、大介神話において雷を昇らせるのは、包直の完全オリジナルというわけではありません。現在残っている文献から、包直がどのように影響を受けたのか検討することができます。

満昌寺縁起

冒頭で、大介の菩提を弔うために満昌寺というお寺が建てられたことを紹介しました。満昌寺には、現在確認できるだけでもふたつの縁起（寺社ができた由来を語る文書）が残っています。

まずは満昌寺中興の祖とされる天岸恵広による縁起を見えます。この縁起は元徳元（1329）年に書かれた、とされていますが、現在読めるものは江戸時代（1812年 / 文化9年ごろ）に成立した『三浦古尋録』に残っています。そのため、厳密に14世紀の縁起そのままではないかもしれません。

同廿七日朝間小雨降、辰刻以後風殊甚辰刻三浦介義明、為河越太郎重頼江戸太郎重長等討干時義明八十有九歳、是城中残留家人等、乘輿昇出、大矢部敵兵大勢競来之間、家人等乘輿逃去、其後依無人之扶持也、大矢部田中驗松切腹矣、時重頼重長等馳寄欲見義明、嗟奇哉忽從松樹一之電光下飛行干四方、雷鳴振天地、依敵兵不得近、悉逝去有漸雲收天晴、而大介尸屍儼然存焉、是大悲威力乎、

（中略）

又建暦二年和田義盛党会干朝比奈城、義盛云、吾祖父義明者、為河越太郎重頼江戸太郎重長等、矢部郷田中驗松切腹矣、時重頼重長等馳寄欲見義明、忽從被松一電光出飛行干四方、雷鳴振天地、依彼等失魂四方散矣、及敵兵逃走、天晴雲收大介之尊骸儼然而存、嗟承是大悲威力盤感乎、依号彼松云御霊樹矣、義盛便勸請義明於御霊大明神、造刻尊像、改塔廟以安置干満昌寺矣、復父為義宗建立一字、号葉王寺彫刻葉師如来而為本尊訖矣、

元徳元年己季春日 天岸恵広帰朝而後改記 [\(注6\)](#)

漢文はわかりにくいので、雷の出てくる箇所だけ書き下してみました（間違えているかもしれないのでご注意ください）。

「大矢部田中の験の松に切腹す、時に重頼・重長等馳け寄り義明を見と欲す、ああ奇なるかな忽ち松樹より一の電光四方に行き飛び下り、雷鳴天地を振わす、よって敵兵近づくを得ず、」

こちらが大介の最期について。そして後段、和田義盛が大介を御霊大明神として満昌寺境内に勧請する際に言及した部分が以下です。

「吾が祖父義明は、河越太郎重頼・江戸太郎重長等の為に、矢部郷田中駿の松に切腹す、時に重頼・重長等馳け寄りて義明を見んと欲す、忽ち被松より一の電光出でて四方へ飛び行き、雷鳴は天地を振わす、」「依って彼の松を号して御霊樹と云う」

表現に少し差がありますが、切腹した義明の遺骸から「一の電光四方に行き飛び下り、雷鳴天地を振わす」つまり電光が東西南北に飛んで落ち、雷鳴がとどろき渡ったということです。雷をもって自らの力を示す雷神的な力が示されています。

続いてもうひとつの満昌寺縁起を取り上げます。これは『神奈川県史』に収録されているもので、『三浦古尋録』より少し時代が下った1842（天保13）年、当時の住職が書き改めたとされているものです。

翌廿七日の天暁より、敵軍依然としてせめ来たり、此時義明公大手の木戸を押しひらかせ、真一文字に敵軍の中に突入、縦横無碍に渡り合ひ、合戦は是迄と、馬上にて腹十文字にかきさばき給ふ、嗚呼惜むべし、行年八十九歳にして、治承四年八月廿七日に卒し給ふ、爰に勇ましい哉、平昔乗りふ駿馬敵群の中をかけぬけ、矢部台の山上に走り、舌を喰ひ忽屈（くつ）死す、後來此駒を山長大明神と崇む、今に例歳二月十九日に神事あり、敵軍自殺とみるより、前後を争ひ駈来りみれば、不思議や傍の松の間より一円の電光飛騰（とう）して、一天俄にかき曇り、雷の音天地を轟す、故に敵勢悉く引退く、時に家臣等義明公の存亡を尋るに、疾風暴雨忽ち晴て、松の傍に義明公の尊骸活るか如にして座し給ふ、（注7）

『三浦古尋録』からは30年ほどしか経っていませんが、大介の死がより劇的に描写されるようになっていきます。雷に関係するところを見てみると、「不思議や傍の松の間より一円の電光飛騰（とう）して、一天俄にかき曇り、雷の音天地を轟す、故に敵勢悉く引退く、時に家臣等義明公の存亡を尋るに、疾風暴雨忽ち晴て、松の傍に義明公の尊骸活るか如にして座し給ふ」。飛騰とは高く上がることを指します。古いほうの縁起では、雷は物理法則に逆らわずに「行き飛び下」っていたのですが、ここではとうとう松の木の間から飛び出して上に昇ってってしまうのです。そして暴風雨の順番も逆になっています。古いほうの縁起によればもともと悪天候の日であった（同廿七日朝間小雨降、辰刻以後風殊甚）のですが、新しい縁起は大介の死と、それに伴う雷の飛騰によって悪天候がもたらされたということです。

雨の降る順番

雨の降る順番はとても重要です。仮に筆者がただの脚色のつもりであったとしても、書かれたものが縁起である以上、内容には神話性が加味されます。鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』(注8)や、後ほど紹介する『平家物語(延慶本)』『源平盛衰記』などを見ると、雨が降る順番がさらに気になってきます。いずれにも満昌寺の古縁起と同じく、「朝から雨が降っていた」こと、「途中からどんどん風雨が激しくなったこと」が記されているからです。つまり、大介の死とは関係なく最初から雨は降っていたのです(そもそもの発端となった富士川の戦い自体に、三浦一族は悪天候のため参戦できなかったことは良く知られています)。

満昌寺縁起が古縁起から新縁起に書き換わるタイミングで、どういうわけか雨が、大介の死を発端に降り始めることになってしまいました。この時期(19世紀前半)に、何かはわかりませんが大介を雷に近づけるようなできごとがあったのではないかと考えられます。そして雷のふるまいは、より古いかたちの神話に残された雷神そのものでした。つまり、大介を雷神のごとく見せかけるのには十分なものだったのです。最後に近代にいたって、包直が最後の仕上げを行いました。赤星直忠が指摘したように「現実に其の土地に伝わっていたものと、新たに北村氏の創作によつたものとが一緒くたになって改めて土地の人に記憶されるに至つた」わけです。

ちなみに、北村包直のより古い著作『三浦史譚』においては、大介の最期はまた違ったふうに描写されます。

朝まだきから、大雨篠を束ねたやうに降りしきり、風さへいとど吹き荒び、雷聲轟き電光閃いて、天地暗澹城中ひつそりした辰刻ごろあはれ、三浦一門の棟梁、大介義明の遺骸は城を東に隔てた大矢部のとある松樹の下に、見出された、見事に割腹し鬚眉活けるやうであった(注9)

どちらかというと古いほうの満昌寺縁起に近い内容で、朝から雨が降っていたことになっています。では、なぜ17年後に出す『三浦大介及び三浦黨』で、包直は新縁起の内容を採用したのでしょうか。大介を雷神だと思ったからでしょうか。そうではないと思います。ここまで自分で脚色を行ったのですから、「創作によつて」「大介は雷神になったのだ」と書きたければ書けたはずで、包直は地元有志とともに腹切松や衣笠城址、満昌寺の中の墓を整備するなどの多数の顕彰事業を行っています。しかし大介を雷神だとする事業はついぞしませんでした。つまり大介の雷神化は意図されていなかったものなのです。後年参照した新縁起がなぜか雷神神話のフォーマットに乗っかっていたゆえに、そんなつもりはなかったのに、包直は大介を雷神に仕立て上げる最後の一手を下してしまった。そして地元の人たちは、雷神神話だとはついぞ思わずに包直の語った「大介さまのお話」を記憶することになったのです。

なぜ御霊は雷神なのか

先ほどはさらっと流してしまいましたが、満昌寺縁起で語られているのはお寺の由来のみではありません。古縁起では和田義盛が満昌寺の鎮守として御霊神社を創建して大介を勧請したこと、新縁起では義明の乗馬が死んで山頂明神（山長明神）となったことが書かれています。紙面の関係上、残念ながら馬については今回スキップせざるを得ないのですが、和田義盛がつくった御霊神社のほうはどんぴしゃで雷神信仰とかかわりがあります。ではなぜ御霊は雷神なのか？ 発端となった菅原道真伝承を見ていきましょう。

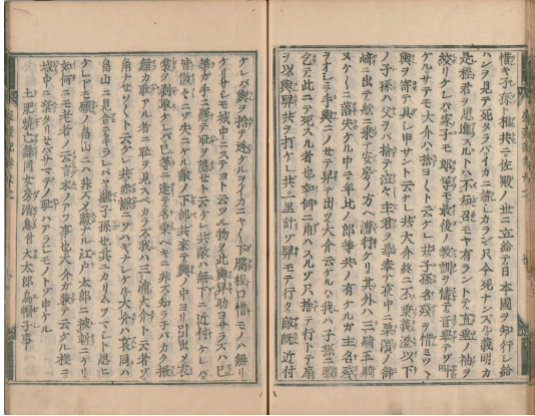
菅原道真＝雷神説が10世紀にはすでに広く知られていたことがわかる資料に『道賢上人冥途記』・『日蔵夢記』という物語群があります。修行の途中で命を落とした道賢＝日蔵が冥途巡りをしていると、太政威徳天という仏教神が現れて自らのことを菅原道真だと名乗ります。怨恨を晴らすために国を滅ぼそうとしたが、仏教が隆盛したために手控えている、しかし自分の眷属が悪さをするのは止めることができないと言うのです。そして雷神（道真の文脈では清涼殿落雷事件の犯人（犯神？）を連想させます）である火雷火氣毒王は自分から見て第三位の使者にしか過ぎない（つまり下っ端だ）とも語るのです。[（注10）](#)

最初は怨霊として怖れられていた道真が最終的に立派な神様、「学問の神様」である天神へと変化していく初期の段階がここに見られます。一方で雷神とのかかわりは忘れられることなく、道真本人ではなくその眷属なのだ、という理解へと変化していきました。

しかしです。ここで疑問が生じます。道真と違い、大介には死んで祟る必要性が見当たりません。当時の価値観で言えば、頼朝の挙兵に伴う戦死は名誉なことです。なぜ御霊になる必要があったのでしょうか。

この疑問自体はたぶん解決されないものなのです。もしかしたら、付加された先に雷神性が逆に御霊のイメージをあとから引っ張ってきたのかもしれない。ヒントになったかもしれない事象を3つ、最後に見ていきましょう。キーワードは「犬死」「修験道当山派」「修験道本山派」です。

犬死



包直の物語や満昌寺縁起に描かれた勇ましいものとは異なる大介の最期を見ていきましょう。『吾妻鏡』の記述はごく簡素で、「討ち取られた」とあります。一方、古い物語群は、大介の死が恥に満ちたものであったといえます。『平家物語』の異本のひとつとされる『源平盛衰記』を見てみましょう。

中に年頃の郎等共の有けるが、主の名残を惜み、手輿にのせて昇て出づ、大介云けるは、我は子孫に暇をて此にて死する者なり、いかに角ばするぞ、只捨て行とて、扇を以て輿昇共を打れ共、一里許ぞ昇もて行、敵近付ければ輿を捨て逃げるを、敵の下部ども来て衣裳を剥取りければ、己等に逢て名乗べきに非ず、知らねばかく振舞か、吾は三浦大介と云者ぞ、角なせぞ角なせぞと云けれ共、赤裸にぞはぎなしける、大介は哀同は畠山にきらればや、継子孫也其ゆかりむつまじと思けれども、すすろなる江戸太郎に被斬にけり、[\(注11\)](#)

なんと衣笠城から逃げ落ちる途中で見捨てられ、略奪され、せめて（孫であり敵方大将である）畠山重保に討ち取られたいと願うも全く関係のない江戸太郎重長に討たれてしまったというのです。「もし大介が望んだとおり衣笠城にとどまっていれば、もう少しましな最期を遂げられただろうに」という、「あはれ」の言葉で締められています。『平家物語』の古態をとどめるといわれる延慶本[\(注12\)](#)にもほぼ同じ内容があり、中世後期にはよく知られていたストーリーなのではないかと推察されます。

このような最期なのであれば、大介が崇りたくなる気持ちもわからないではありません。実は衣笠城址にも大介を祀る御霊神社があり、こちらは満昌寺の造営よりも早く勧請されたと『新編相模国風土記稿』が言っています[\(注13\)](#)。もしかしたら大介は一時期本当に怨霊、それも源頼朝や自分の子孫に祟った怨霊だったのかもしれない。

ちなみに、三浦一族にまつわる文書類は1247年の宝治合戦などで散逸してしまったと考えられているため、満昌寺古縁起にある御霊神社勧請の由来を当時の資料で確かめることはできません。残念なことです。

画像は『源平盛衰記』 出典：国立国会図書館デジタルアーカイブ [\(注14\)](#)

修験道当山派

残りのふたつは修験道、つまり山岳信仰から雷神について考えるルートです。三浦一族は山岳信仰と深いかわりをもっていた可能性があります [\(注15\)](#)。

衣笠城には729（天平元）年に行基が開いたとされる金峯山蔵王権現がありました。金峯山といえば金峰山。『道賢上人冥途記』・『日蔵夢記』の舞台、菅原道真が太政威徳天であり、雷神がその眷属であることが語られた最初の場所です。

蔵王権現は平安時代後期に貴族たちの信仰を集めました。経典を埋めることによって功德を積む納経の儀式が藤原道長によって（現存する資料上）はじめて行われたのも金峰山でのことです [\(注16\)](#)。衣笠城址からも経塚が発見されていることから [\(注17\)](#)、この信仰が12世紀の三浦一族にも伝わっていたと考えられます。

一説によると『日蔵夢記』は御霊信仰だけでなく蔵王権現にかんしても最初期の説話として数えることができるそうです。御霊＝太政威徳天と蔵王権現がそれぞれに影響をおよぼしあいながらその神格を確立していったとすると、雷神についての『夢記』の理解も蔵王権現と時を同じくして各地にもたらされていったことは想像に難くありません。



衣笠城址の金峯山蔵王権現あと

修験道本山派

当山派と対立した本山派にも、雷神信仰を考えるヒントがあります。

菅原道真を祀る北野天満宮では、菅原道真=天満大自在には老松（おいまつ）という従者がいるとしています。ここで北村包直による義明の最期をもう一度読んでみてみてください。段落タイトルが「老松」なんです。

北村は大介の一生を松の木にたとえました。その意図がどこにあったのかはわかりませんが、少なくとも大介がそこで腹を切ったとされる腹切松のことは念頭にあったでしょう。また門松や節分の飾りに見られるように、松の木に神聖さを見る風習も現代に残っています。柳田も「雷神信仰の変遷」で以下のように指摘しています。

天神の言葉に、我従者に老松富部といふ二人あり、老松は久しく我に随ひて来れる者なり。是なん至る處に松の種は蒔くとあるのは、恐らくは賀茂の古式に存するミアレ木の思想と同系のもので、植物に由つて新神の出現を表示する風習が、たまゝ北野に於ては此形を採つたので無いかと思ふ。

天満大自在の従者老松は、本地仏（神仏習合によって生まれた、神の本来の姿とされる仏のこと）が不動明王とされています。実は三浦一族、不動信仰にも深いかかりを持っているのです。三浦義明の祖父にあたる三浦為継が後三年の役に出陣したとき、衣笠城の不動尊が為継を敵の矢から守ったという言い伝えがあります。この不動尊は現在ふもとの大善寺というお寺に安置されています。そのほかにも、城の敷地内にあった「不動の井戸」、村境には「前不動」と、不動信仰が篤かった痕跡はあちこちに残っています。

当山派と本山派の対立が激化したのは中世後期ということです。大介たちの時代、両派の信仰はまだ融合してたでしょう。山岳信仰が培われた雰囲気の中で、大介=雷神のイメージが醸成されていく。そこにはもしかしたら祟る御霊としての恐れもあったのかもしれませんが、鎌倉幕府における三浦一族の地位を確立してくれた祖に対する感謝があったのかもしれませんが（家の成立と先祖供養もとてもおもしろいテーマなのですが（やはり紙面の関係で）、今回はスキップします）。

画像は前不動

注・文献リスト

- (1) 北村包直『三浦大介及三浦黨』一二三堂, 1925. | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879884/194>
- (2) 神奈川県県民部県史編集室「神奈川県史. 別編1」神奈川県, 1983. p. 264 | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9522836/140>
- (3) 赤星直忠「三浦半島城郭史」pp.24-25 (『横須賀市史. 第8冊』横須賀市教育委員会, 1955.) | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3046814/23>
- (4) 雷神信仰の変遷 (パブリックドメインのテキストデータがあります)
<https://docs.google.com/document/d/e/2PACX-1vQnOlxz7f7EvhN42pFCBX5Jlp7VsVy-lmRI52HvTTHDxINzBvjJuGG1elpPg5se6TVwkcE05t2hg326/pub>
- (5) 劉 枝万「雷神信仰と雷法の展開」東方宗教 = The Journal of eastern religions / 日本道教学會 編 (67), p1-21, 1986-06日本道教学会
- (6) 加藤山寿『三浦古尋録: 校訂』pp.90-91 | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3448967/58>
- (7) 神奈川県県民部県史編集室『神奈川県史. 資料編 8 [2] (近世 5 下) 本編』神奈川県, 1979. pp.574-576 | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9537980/317>
- (8) 五味文彦・本郷和人編『現代語訳 吾妻鏡1 頼朝の挙兵』p.27, 吉川弘文館, 2021.
- (9) 北村包直『三浦史譚: 少年教育. 第1編』p.61, 一二三堂, 1908. | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1919389/43>
- (10) 「金峯山浄土」形成の基盤-「日蔵夢記」と五台山信仰- | 明治大学学術成果リポジトリ <http://hdl.handle.net/10291/4127>
- (11) 新編相模国風土記稿 (源平盛衰記) 『大日本地誌大系. 第40巻』p.283 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1179240/148>
- (12) 延慶本 平家物語 読み下し版 (漢字ひらがな交じり) | 菊池眞一研究室 <http://www.kikuchi2.com/sheet/heikene1.html>
- (13) 「新編相模国風土記稿」p.280 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1179240/147>
- (14) 源平盛衰記 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2544838/30>
- (15) 神奈川県県民部県史編集室 編『神奈川県史通史編1』p. 359, 神奈川県, 1981. | 国立国会図書館デジタルコレクション (閲覧には利用登録が必要です) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9522771/204>
- (16) 藤原道長の宗教心 | 千里金蘭大学 学術リポジトリ <http://id.nii.ac.jp/1378/00000242/>
- (17) 『神奈川県史通史編1』p. 358 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9522771/204>

雷になった大介さま

2022年9月10日

発行 別館1617

<https://bekkan1617.wordpress.com/>

